

第二編

原

始

概 説

地 形 的 特 色

矢吹町は、福島県西白河郡の北東部に位置し、町域六〇・七九平方キロメートルを有している。北部は、岩瀬郡鏡石町、北西部は同郡天栄村、西部は西白河郡大信村、南部は同郡の泉崎村・中島村、東部は石川郡の玉川村・石川町とに接している。

地形的には、阿武隈山地と奥羽脊梁山脈とに狭まれ、南北に長くのびる中通り低地帯の南端近くに位置している。この中通り低地帯を阿武隈川が南から北へ貫流し、その流域に豊かな耕土を形成し、現代の主要都市の発達の基幹となっている。町内の河川は、町域の東縁を前述の阿武隈川が北流し、西部には隈戸川が北流し、また南部には泉川が北流し途中から東へ流れを変え阿武隈川に注いでいる。

地質的には、これら河川流域に、沖積世に形成された標高二五〇～三〇〇メートル前後の低位の段丘や氾濫原が発達し、その他の地域は、洪積世中期に形成された標高二八〇～三〇〇メートルの郡山面と、洪積世初頭に形成された標高三〇〇～三三〇メートルの丘頂面を残す丘陵とで構成され、これらの上層を洪積世中・後期の白河D・C・Bローム質火山灰層と、白河Aローム質火山灰を含む沖積層とが覆っている。前述の洪積世初頭の丘陵を構成する地層は、いわゆる「白河石」とよばれる石英安山岩質熔結凝灰岩であり、町域の各所で露頭がみられ、一部では石材として採掘が行われている。

矢吹町域には、峻険な山地はなく、東部から中央部にかけては、三城目原・北原・南原（神田周辺）・八幡原・岡谷地原などの平坦面が存在し、総称して矢吹が原と呼ばれている。矢吹町域は、この矢吹が原を中心に、標高二五〇～三三〇メートルの高度の比較的平坦な地形を示している。

以上のような自然を舞台とし、私たちの祖先が、そこでどのような歴史を展開したかを明らかにしてゆきたい。

原始時代の概要

人類の誕生は非常に古く、地質学上の第四紀の洪積世の初めといわれ、約二〇〇万年前と推定されている。最初の人類は、現代人とは形質的に大きな差があり、人類学上、猿人とよばれている。しかし、すでに直立歩行し、礫の一端を打ち欠いて作った礫器や、骨を打ち割って先端を鋭くしたものを道具として使用していると推定されている。

人類は、このような原始的段階から、約二〇〇万年にわたる歴史を展開させ、今日の高度な文明と複雑な社会を構成するに至った。

このように長期にわたる複雑な歴史の中で、最も初源的な文化の段階にある時期が「原始時代」である。具体的には、人類の誕生から、階級制度が確立する以前までとし、日本では階級制度の存在が推定される古墳時代より以前、すなわち三世紀ころまでをその時期とする。

原始時代は、人類の歴史の中で、時間的には、非常に大きなウェイトを占めている。文化的には未開の状況にあるが、長い時間の推移のなかで、徐々に文化的な発展を示している。考古学上、この文化内容の変化をとらえて、原始時代をさらに次のように四時期に区分している。

旧石器時代

人類の初源的段階であり、地質学上の洪積世に属し、石を打ち欠いて作った、いわゆる打製石器を用いていた時期である。その終末は今から約一万年前と推定されている。

縄文時代

地質学上の第四紀の沖積世の初頭、約一万年前から、打製石器以外に磨製石器を使用し、また新たに土器の製作を開始した。ヨーロッパや中国では、旧石器時代と関連づけて、沖積世の石器時代を新石器時代とよんでいる。これらの地域ではこの時期から牧畜もしくは農耕を行っているが、日本列島では、この時期に牧畜や農耕を行った形跡はない。日本の同時期の土器には、縄目の文様がつくことが多いので縄文土器とよんでいる。また文化内容上の特異性があることから新石器時代とはよばず、縄文時代とよんでいる。

生業は、狩猟・漁撈と自生植物の採集を基本とする、いわゆる採集経済の段階にあった。縄文時代は、紀元前三世紀初

めまで続いた。

弥生時代

紀元前約三〇〇年ころ、北九州地方を中心としてアジア大陸の影響をうけた新しい文化が形成された。稲作・機械の技術を有し、金属器をもつ文化であり、やがて東北地方北部まで普及する。自然物の採集を生業とする段階から、自ら田畑を開き作物を収穫する生産経済の段階へと大きな変化をした時期である。四世紀になると階級社会へと変質し、原始時代から古代へと推移する。

矢吹町内での遺跡の発掘調査は非常に不十分な状況にあるが、現存する資料をもとに各時期について検討を加えたい。

(目黒 吉明)

第一章 旧石器時代

一人類の出現

人類の誕生は、今から二〇〇〜三〇〇万年前といわれている。現在、最古の人類としてあげられるのは、南アフリカ・東アフリカで発見されているアウストラロピテクスである。頭骨は類人猿に似ており、頭丈で高さが低く、脳頭骨の容積量は五〇〇cc強と計測されている。現代人の平均的容積は一、四五〇ccであり、約三分の一強にあたる。ゴリラの平均容積が五〇〇ccであり、これに近似するが、骨盤の形から直立歩行を推定され、四足歩行の類人猿とは明瞭に区別され、人類として認められている。

直立歩行が人類の運命を決定付けたといわれる。一つは、頭骨を下から脊柱により支えることにより、頭骨の発達を容

第1表 地質年代と人類の出現

地質年代		氷河の消長		年代 (万年前)	人 類	
第 四 紀	沖積世	後 氷 期		1	(縄文時代)	新 人 旧 人
		ヴ ィ ル ム 氷 期		5.5		
		リス・ウィリム間氷期		15		
	洪 部	リ ス 氷 期		23	原 人	人
		ミンデル・リス間氷期		38		
		ミ ン デ ル 氷 期				
	積 部	ギュンツ・ミンデル間氷期			猿 人	人
		ギ ユ ン ツ 氷 期		100		
		ギュンツ・ドナウ温暖期				
		ド ナ ウ 間 氷 期		200		
新第三紀	鮮新世					

または両刃礫器（チョッピングツール）・スクレイパーなどが発見され、前期旧石器として注目されている。

旧石器時代は、約一万年前まで続くか、この間、徐々に発達をみせ、ヨーロッパでは、洪積世末の三〜一万年前には、アルタミラ・ラスコーなどで知られる優れた洞窟壁画をのこしている。

第二次大戦前の研究では、日本列島内では縄文文化か人類最古の文化であり、その時期は数千年前以降と考えられている。昭和二十四年、相沢忠洋氏が群馬県岩宿の赤土、関東ローム層（洪積層）から発見した石器が契機となり、日本列島

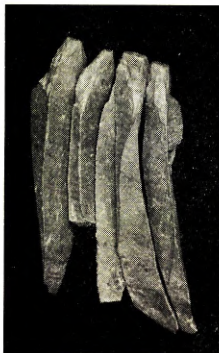
易にしたことであり、思考能力を発達させた。さらに、両手の解放により、道具の使用を可能にしたことがあげられる。

アウストラロピテクスは、自然礫の一端を打ち欠いて作った礫器（打製石器）を使用したといわれ、この点からも人類としての確固たる位置を与えられている。アウストラロピテクスは、類人猿との類似もみられるところから「猿人」とよばれるが、古人類は、形質上から大きく、猿人・原人・旧人・新人に分類されている。

元 謀 原 人

アジアでは、北京原人・ジャワ原人等が著名であったが、最近中国で元謀原人（一九七五、雲南省元謀県）が発見され、その年代は一七〇万年前と推定されている。詳細は不明であるが、すでに火を使用していたといわれている。火の使用は、約五〇万年前の北京原人が最初とされていたが、さらにさかのぼることになる。

近年、韓国の全谷里遺跡（ハンダアクス）・石球



石刃接合状態

四点が現存している（須賀川市博物館に移管）。いずれも硬質頁岩を縦に長く剥離し、基底部のみ調整加工したもので、最大のもは一一・六センチの長さがある。形態上から成田型刃器とよばれており、時期は約二・三万年前と推察され、本県内の歴史資料としては現在のところ最古の遺物といえる。とくに、そのうち数点の石器が相互に接合することが指摘されており、石器の製作過程を示す資料として貴重な存在となっている。



陣ガ岡遺跡全景（三城目字陣ガ岡）

内の旧石器の研究が進められ、現在では、全国的に数多くの遺跡と遺物とが確認されている。各地で発掘調査も進められ、洪積世の赤土の中から多くの遺物が発見されている。しかし、その大部分は洪積世終末期に近い後期旧石器時代のものである。（目黒 吉明）

二 矢吹町出土の旧石器

陣ガ岡遺跡

昭和二十一年、矢吹町と鏡石町との境界にある陣ガ岡の石切場から十数点の打製石器が発見され、阿武隈考古館（当時、玉川村泉郷、館長故首藤保之助）に収蔵された。当時、まだ旧石器文化が日本列島に存在することが明らかにされなかった時期であり、故首藤氏の考古学に対する熱意が、貴重な資料を現在に伝えたといえる。

現場は、阿武隈川の氾濫原に突き出した丘陵上であり、白河石（石英安山岩質熔結凝灰岩）の上層の白色粘土層中から一六点の石器が発見され、その一

礫の上端部に横から打撃を加え、水平面をつくりだし、この水平面につきつぎと打撃を加えて、縦長の石刃原体を効果的に剝離していることが知られる。

矢吹町内からは、現在のところ旧石器は前述の陣ガ岡以外に発見されていない。しかし、県内では、須賀川市の乙字ガ滝遺跡、猪苗代町の大神遺跡の尖頭器、耶麻郡高郷村の塩坪遺跡のナイフ型石器など貴重な資料が発見されており、調査が十分に行われれば、矢吹町内から遺跡がさらに発見されるものと思われる。

(目黒 吉明)

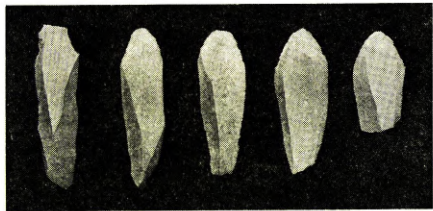
三 旧石器時代の生活

自然の たたかい

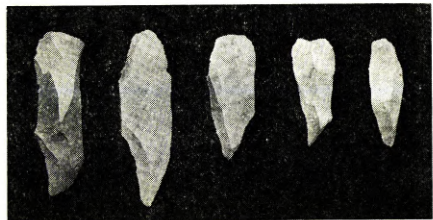
第四紀は人類の時代といわれているが、一方洪積世は、北半球に幾度か氷河が発達した時期でもある。日本列島も、これにともない幾度か寒冷な時期があったと推定される。

寒冷な気候は、植物相に影響を与え、最後の氷期であるウィルム期には、低地帯でも亜寒帯または亜高山帯生のエゾマツ・コマツガ・オオシラビソなどの針葉樹を主とする植物相となり、亜間氷期にはブナ・スギなどの冷温帯植物相であったと推定されている。

後期洪積世の動物相については、明らかではないが、郡山市熱海町のリス・ウィルム間氷期に推定される地層からナウマン象の臼歯化石が発見されており、また岩手県花泉化石層や野尻湖の発掘調査結果は、ウィルム氷期にナウマン象やオ



刃 器 1 三城目・陣ガ岡遺跡出土



刃 器 2 三城目・陣ガ岡遺跡出土

オツノシカ、野牛などの大型獣が棲息した可能性を示している。

洪積世終末期の動物相は明らかではないが、前述のような大型獣は徐々に減少し、現生種の動物相へと変化していったものと推定される。

後期旧石器時代の遺跡であるスペインのアルタミラ洞窟あるいはフランスのラスコー洞窟などの壁画の大部分は、野牛あるいはオツノシカなど大型獣を描いており、狩猟が生業の中心であったことを示している。

陣岡岡の旧石器時代の人びとも、打製石器をもって狩猟を中心とした生活を営んだものと思われる。もちろん、自生の木の実・山菜なども広く採集の対象としたと推定されるが、まだ土器作製の技術はなく、食物の加工は煮炊は行わず、もっぱら焼く方法が用いられ、食生活は非常に限定されたものであったと推定される。

現存する遺物は、石器のみであるが、もちろん、木器・皮革製品・骨角器あるいは植物性繊維の編物なども存在したと思われるが明らかではない。

冬の厳しい寒気、ときおり降る火山灰のもとで、石器を利器として不安定な狩猟を生業とする生活は、自然との厳しい戦いであったと推測される。

(目黒 吉明)

第二章 縄文時代

一 縄文文化の特質

縄文文化の誕生

長く続いた洪積世も、一万年ころになると氷期も終末をとげ、現在に続く沖積世となる。氷期には、極地周辺および高山を中心として氷が厚く堆積する。その結果、海水が減少し、海面が低下して海退とよばれる現象を呈する。ヴィルム氷期には最高八〇メートルほど海面が低下し、日本列島の南北両部は陸橋状に大陸と地続きになったといわれる。最後の氷期であるヴィルム氷期の末には、気候の温暖化とともに海水面は上昇し、日本列島は現在のように孤島化していった。

この孤島化の時期に相応して、日本列島内の旧石器文化は大きな発達を示す。すなわち、石刃の次にナイフ形石器が現われ、また局部磨製石器、両面加工の槍先形尖頭器、有舌尖頭器、細石刃など各種の石器が出現し、やがて有舌尖頭器に土器が伴出し、新しい文化へと変質する。

土器出現の時期は、放射性炭素(C^{14})の測定結果では、約一万二、〇〇〇年前と測定されており少なくとも一万年前を降ることはないと推定される。土器を伴うこの新しい文化は、紀元前二―三世紀ころまで約八、〇〇〇年もしくは一万年間、日本列島内で独自の発展を示すのであるが、主要な遺物である土器には縄目の文様が多用されることから縄文土器と名付けられ、さらにこの時代を縄文時代とよんでいる。なお、周辺大陸の文物との対比により、縄文時代の始源を紀元前二、五〇〇年ごろとする説もある（山内清男）。

〔注 放射性炭素(C_{14})の年代測定〕 生物は生存中、自然の放射性炭素を吸収し一定量を体内に遺存する。この放射性炭素は、半減期が五、六〇〇年と算定されており、発掘により伴出した木炭・骨・貝殻などに遺存する放射性炭素から半減期を用いて絶体年代を算出している。

土器は、石器や骨角器などと比較した場合、造形が容易であり、時代や地域ごとの製作者の意図をよく反映し、時期的な共通性、あるいは地域的な相異点を表現している。一世紀にわたる研究により、土器の形態的特色、文様の特色、胎土・技法等も加味して、土器の型式設定が行われている。時代的には約五〇型式に分類されるが、一〇型式前後を単位として、縄文時代を早期・前期・中期・後期・晩期の五期に大別している。

縄文早期の土器 早期土器は、縄文土器の中で最も古い時期の一群であり、底部が砲弾型に尖った、いわゆる尖底土器とよばれる特色をもった土器群である。

縄文前期の土器 前期になると、底部は平底となり安定し、胴部形態が直線的なものからわずかであるが曲線的な変化を示す。前期前葉の土器には各種の縄文（擦糸文を含む）が施されており、縄文原体の発達を示している。

縄文中期の土器 中期の土器は、深鉢形のはかに浅鉢形の土器がつくられ、深鉢形は、立体的な把手や、隆線文（粘土紐を貼付けた文様）が盛行し、豪壮華麗な土器がつくられる。また集落の数や規模も増大し、大きな発達を示す。

縄文後期の土器 後期は、精製土器と粗製土器が作り分けられ、精製土器は、深鉢・壺・浅鉢の注口土器（土瓶状の注口のついたもの）など各種の器形が発達する。

縄文晩期の土器 晩期は、器形上は後期の器種を継承するが、文様は雲形文が発達し、よく研磨された精緻な土器がつくられるが、器形は定形化の傾向を示す。

このように縄文早期の尖底土器から後期・晩期の豊富な器形へ発達し、その間多くの資料が残存し、縄文時代の人々の意識をもっともよく現代に伝えており、また縄文文化の発展過程を示す最大の資料となっている。縄文時代の研究は、土

『日本の考古学』Ⅱ「縄文時代」収録編集年表による。なお年代については放射性炭素(C_{14})による年代と山内清男の推定年代の両説を併記した。

器の編年を基幹として進められている。

縄文土器は前記のような時期別の編年が組立てられる一方、地域的な特色をも有し、国内は一二〜一三の文化圏に大別される。

福島県内は、前期から中期にかけては岩手県・宮城県・福島県にまたがる大木式文化圏に属するが、時期的には関東地方の影響を強くうけ、ときには北陸の影響をもうけるなど複雑な変化がみられる。

土器以外の土製品としては、土錘・土偶・土版・耳飾・スタンプ形土製品・三脚土製品などがある。

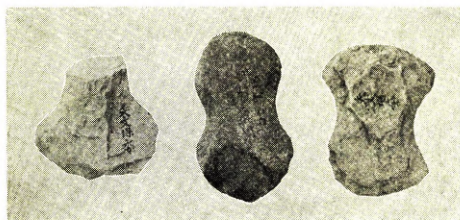
縄文期の石器

土器について大量に発見されるのが石器である。石器は大部分が利器として用いられたものであり、生業を考察する資料として重要な意義をもっている。

旧石器時代と比較すると、石器の形態が用途にあわせて定形化し、種類が多くなる。また旧石器時代には局部磨製石器があり、刃先を局部的に磨いた石器があったが、縄文時代になると、全面を磨いて仕上げた磨製石器が多用される。

縄文時代の石器の種類としては次のようなものがある。

打製石器：石鏃・石槍・石斧・石筥



打製石斧 町内出土



打製石鏃 中畑地内出土



凹 石
柿ノ内字田内・芹沢遺跡出土

石 皿
町内出土

磨製石斧
狐石出土（佐藤信之蔵）

・石匙（石小刀）・石錐・三脚石器

磨製石器：石斧・石錐・石刀（棒）・石偶・三脚石器・磨石・玦状耳飾・飾玉

蔽磨製……石皿・石棒

その他……凹石

石器の中で、とくに石鏃の出現は、新しい狩猟用具として生活面に大きな影響をもたらした。また石皿は、安山岩質の石器であるが、磨石と併用して精粉的機能が推定され、生活上大きな意義があったと思われる。

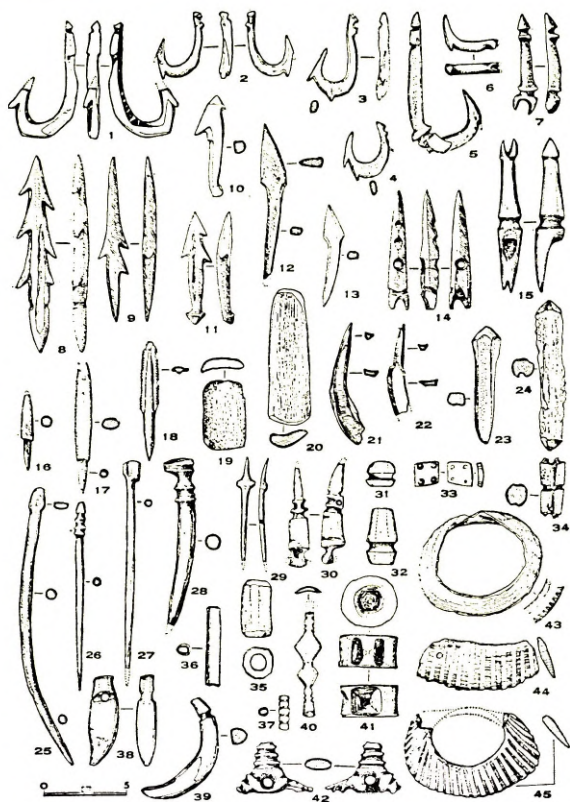
土器・石器以外の遺物としては、骨角器・木製品・繊維製品・自然遺物などがある。

骨角器は、当時、食べ残した貝殻が捨てられ、層をなして堆積している貝塚の中から土器・獣魚骨などとともに発見される。骨角器の大半は鹿角を用いてつくられ、釣針・銚頭・角鏃・針、その他腕輪（貝製）・腰飾・耳飾・ヘアピン状のものなど、内陸の遺跡では発見されない貴重な資料がある。

木製品・繊維製品は、湿地遺跡から発掘されるもので、発見例は非常に少ない。他県の例では丸木舟・櫂・木器、石斧を装着した柄、籠・縄・編布などがある。

自然遺物としては、内陸の遺跡では、炭化したクルミ・栗・ドングリ・トチの実などがある。貝塚からは、貝類をはじめ、獣魚骨など狩猟・漁撈生活を裏付ける遺物が発見されている。

第1図 寺脇貝塚出土の骨角器（いわき市教育委員会蔵）



1. 2. 3. 4. …単式釣針, 5. 6. 7. …組合せ式釣針 (6は針部, 7は軸部, 5は結合したもの), 8.
 9. 10. 11. …有茎式鉾頭, 12. 13. …槽 (「ノ」の字形尖頭具) 14. 15. …茎槽式鉾頭 (14は有脚型,
 15は有尾型), 16. 17. 18. …鎌 (17は刃溝鎌, 18はエイの尾棘), 19. 20. …篋, 21. 22. …錐 (猪
 牙製), 23. 24. …両頭尖頭具, 34. …角錘, 30. 31. 32. …弭形製品, 25. 26. 27. 28(?) …髪飾(?)
 33. 35. 36. 37. 38. 39. 40. …首飾(?) (38は熊牙製, 39は猪牙製, 36. 37. は鳥管骨製), 41. …
 耳飾 (蛟脊椎製), 42. …腰飾(?), 43. 44. 45. …腕飾 (貝輪)

(『福島県史』抜粋)

縄文時代の
集落跡

縄文時代の遺跡は、洞窟や岩陰を住居とした遺構と、平地に直径数メートル前後の円形もしくは方形で、深さは数十センチほどの竪穴を掘り、さらに周壁から離れた床面に径二〇～三〇センチの穴を掘り、柱を立て、竪穴の周辺から円錐形の屋根をかけた竪穴住居が推定されている。住居址群の周辺部には廃棄された土器片や石器を包含する地層があり、海岸部では貝塚が存在することもある。これらは不用品や食滓を捨てたゴミ捨て場と推定される。また住居址の周辺には、食物の貯蔵穴もしくは墓壙と推定されるものが発見され、貝塚では人骨や犬骨が埋葬された状態で発見される。

このような遺構群をまとめて集落跡といえることができる。集落跡には広場あるいは飲料水の供給地としての湧水の存在なども考慮する必要がある。集落跡は、時期によって規模も異なり、また立地にも変化がみられる。なお、生活の基盤となる集落跡とは規模を異にした少量の遺物しか発見されない遺跡があり、一時的な生活跡とみられ、狩猟小屋的なものと推定されている。

矢吹町内の考古学的調査は、まだ十分ではない。石井亘が長年にわたり中畑地区の遺跡分布調査を行い昭和三十八年に『矢吹町中畑地区遺跡地名表』（以下『中畑地区地名表』と略記する）として一応の成果をあげているが、その他の地区では詳細な分布調査が行われていない。また発掘調査も本格的なものは少なく、矢吹町の原始・古代を明らかにするには不十分な状況である。したがって福島県内の資料で補足して、矢吹町の原始時代の概要を記すこととする。

（目黒 吉明）

二 縄文時代の遺跡と生活

(一) 縄文 早期

生業形態の転換

地質学上の沖積世を迎えるとともに、気候は現代に近いものとなり、植物相も温帯性のものとなった。これにともない動物相も洪積世の大型獣は絶滅し、現代日本列島に棲息しているシカ・イノシシを中心とした動物相へと変化していった。火山活動も弱まり、火山灰の降下は減少し、地表には腐植土を中心に黒褐色の土壌が堆積し始め、生活の環境は大きく変化した。

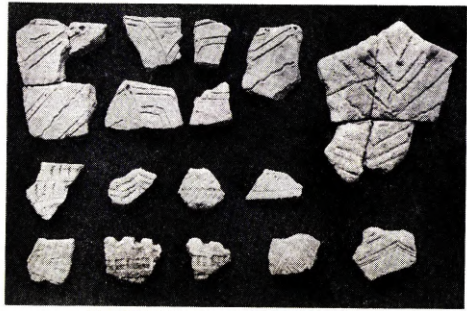
このような環境変化の中で、土器と石鏃をはじめとする石器群をもった新しい文化が形成されていった。

尖底土器

早期の土器は底部が砲弾形に尖った、いわゆる尖底土器が主体を占めている。尖底につくられた理由については、尖底部を地中に指し込み直立させ周辺で、木を燃焼させて食物の煮沸を行ったと考えられている。器形も単純な鉢形が主体をなすが、早期中葉になると波状口縁のものがつくられる。

早期初頭の土器は、粘土紐をはりつけた隆線文土器とよばれるが、三時期ほどに分類が考えられている。次に爪形文土器↓押圧文土器↓回転縄文土器と変遷する。現在のところ本県内からは押圧縄文土器以前のもものは発見例がない。これらの縄文初頭の土器群は、山間の洞窟や岩陰遺跡などから発見されることが多く、平坦な低地帯に位置する矢吹町内からは出土の可能性は少ない。

回転縄文土器としては、関東地方の井草・大丸・夏島・稲荷台などの諸型式が著名であり、その影響が本県までも及んでおり、西白河郡西郷村の坂ノ下遺跡や岩瀬郡長沼町の宮前遺跡から発見されている。しかし、この時期の遺跡の発見例は非常に少ない。



縄文早期土器 中畑根宿・下荒具C遺跡出土

早期中葉になると、尖底土器であるが口縁部に変化を加えた波状口縁がつき、文様は大きく変化し、アカガイのような二枚貝の腹縁のギザギザした部分を押しつけて施文する貝殻腹縁文を多用する常世式（田戸上層式）土器が現われ、県内に広く分布する。矢吹町下荒具C遺跡は、この時期の遺跡であり、町内で発見されている最古の土器といえる。

下荒具C遺跡

下荒具C遺跡は、泉川の南岸に位置し、泉川の氾濫原（水田地帯）を見下す台地上に立地している。標高は二八五メートルほどであり、大字中畑字下荒具にあたる。昭和四十八年三月、県営圃場整備事業にかかるため、矢吹町教育委員会（発掘担当者 永山倉造）が発掘を実施した。遺構は検出されなかったが、土器と石器とが発見された。土器は薄手のものであり、底部は発見されなかったが、波状の口縁部があり、文様は貝殻腹縁文をはじめ平行沈線文・小波状沈線文がみられる。また口唇部に刻みを入れ、直下に角押文を横走させた土器などが発見されている。

矢吹町内の縄文早期の遺跡は下荒具C遺跡しか発見されていない。しかし、常世式以後の土器は、大信村・西郷村・白河市・石川町などで発見されており、それ以前とくらべ遺跡数の増加が知られている。

さきに早期初頭の遺跡は洞窟や岩陰などからの発見例が多いことにふれたが、中葉以降になると数も多くなり、また立地もやや開けた地形に占拠することが指摘される。これは旧石器時代から縄文早期初頭への気候変化によって植物相・動物相に変化があり、狩猟・採集形態に影響したが、新しい生業形態の形成とともに遺跡の数が増加したとも考えられる。あるいは早期後葉に関東地方からの移住の可能性も今後の課題として検討を要するものがある。

しかし、早期後葉の集落は、まだまだ小規模であり、二棟一群すなわち、二棟で一群を形成したともいわれており、また炉は一般に屋内にあるといわれ、家族構成は不明であるが、小規模な集落であったと考えられる。

狩猟と採集の生活

早期中葉の遺跡である茨城県花輪台貝塚から犬骨が発見され、家犬の存在が推定されている。下荒具C遺跡の人々も石鏃を用いた弓矢をたずさえ、犬をつれて周辺の山野でシカ・イノシシなどを対象に狩猟したものと推定される。もちろん、一集落の人数も少なく、集団的な狩猟は考えられず、数人程度による個人的な狩猟に近いものであったと推定される。

なお、早期の中葉から早期末にかけて形成された岩手県蛇王洞洞穴においては、ニホンジカ（約一三）、イノシシ（約一〇）を中心にカモシカ（約三）、タヌキ（一）、ノウサギ（一）、ムササビ（三）、ニホンザル（四）、鳥類（三）などの骨の出土が報告され、さらにイノシシ・シカには乳歯を有するものが多いことが指摘されており、狩猟の傾向を示すとともに狩猟技術の低さを感じさせる。

縄文早期は、旧石器時代に比較し、土器や弓矢の発達など大きな変化を示している。土器は食物の煮沸を容易にし、食物の採集対象物を多くし食生活を豊かにし、弓矢は飛道具として大きな威力を示したと考えられるが、前述のように集落の規模は小さく、その生活はきびしいものがあった。新潟県室谷洞窟出土の人骨に激しい労働を行った痕跡が指摘され、横須賀市平坂貝塚の人骨に飢餓線がみられるなど、生活のきびしさを伝えている。

このような生活の中で、縄文時代の人々は、土偶に自然の幸の豊かさを祈るとともに、遠方から（箱根・伊豆・山形など）石器の材料として黒曜石を求め、狩猟の向上を図っている。また土器形式においても敏感な反応を示し、下荒具C遺跡のように海岸線から遠隔の地にありながら、海産の貝殻を用いて貝殻腹縁文を施すなど、広い交易の存在と人間性を強く伝えている。



渡池上遺跡全景 中畑字中畑南



縄文前期土器 中畑字中畑南・渡池上遺跡出土

(二) 縄文前期

平底土器

縄文早期の土器はほとんど尖底の不安定な形であ

ったが、前期になると平底の安定した形となる。器形は直線的に開く深鉢が基本的な形であるが、胴部がふくらみ幅広い口縁部が少し外反し、口縁が小さな波状を示すものもある。前期後葉には、浅鉢に近いものや胴下部が円筒状をなすものなど器形の変化が知られる。

土器の文様は、前期前半には、縄文（繊維の紐を二本以上撚ったものを直接土器に回転させて施文したもの）と撚糸文（撚った紐を細い棒状のものに巻き付けて、これを回転させて施文したもの）とが非常に発達し、各種の施文がみられる。前期後半になると細い竹管を半分に割ったもので施文する半截竹管文（はんさいちくかんぶん）と貝殻腹縁文が発達し、東北地方では粘土紐を貼付けた文様もみられる。

矢吹町内では前期の遺跡は、渡池遺跡・赤沢山遺跡・五斗時2遺跡などが知られている。

渡池遺跡

渡池遺跡は、大字中畑字中畑南にあり、中畑中学校の西南約一キロメートル、渡池の南に続く夏張池の南の台地上に位置している。標



縄文前期土器 大和久字赤沢・赤沢山遺跡出土

高は二九〇メートルほどであるが、台地の北東と南西には夏張池までのびる水田面が広がり、見通しのきく地形である。『中畑地区地名表』には渡池上遺跡として掲載されており、縄文土器・土偶（二片）・石鏃（楕形・有柄・アメリカ式）のほか墨書銘土師器などが発見されたとある。付近の縄文遺跡として乗越1・狐山10遺跡がある。

遺物は、少量の土器片が収集されているが小片で時期の明確なものが少ない。土器片中横走する隆帯に縦に刻みを入れ、隆帯の下側にそって二条の縄文原体を押圧した文様は、花積下層式に相当と推定される。また口縁部に縦の刻み目を入れ、その下に横走する三本単位の沈線文を配したものは、前期後葉の浮島式相当と推定される。渡池遺跡の年代は、花積下層式・浮島式の二時期と推定されるが、さらに平行沈線文をもつ土器は早期の可能性があり、また有柄石鏃の出土などは後期以降にも生活が営まれた可能性を示しており、複合遺跡といえる。

赤沢山遺跡

赤沢山遺跡は、大和久字赤沢山にあたる。隈戸川が大信村から東流し、矢吹町に入って流れを北に変えるが、遺跡はこの流路変更地点の右岸の台地上に位置し、標高は約二八〇メートルほどである。

遺物は、少量の土器片のみであるが、前期前半の特色を示すものである。平行口縁で深鉢形と小波状口縁で深鉢形の器形が推定される。文様は、横走する羽状縄文が緻密に施されており、少片であるがループ文に近いものもみられる。ループ文が少ないが、関東地方の関山式に相当するものと思われる。

五斗蒔2遺跡

五斗蒔2遺跡は、大字中畑字松房にあたり、松房池の南岸の台地上にあり、後背には比高一〇メートルほどの丘陵がある。遺物の発見量も少なく、時期も明確でないが、半截竹管による施文と想定される平行沈線と、横走する列点文とがあり、前期後葉の太木5式あるいは



五斗蒔2遺跡全景 中畑字松房



縄文前期土器 中畑字松房・五斗蒔2遺跡出土

関東地方の浮島式と推定される。

縄文前期の生活

矢吹町内の前期

の遺跡数は三カ

所あげられ、早期の一遺跡に対し増加が認められる。これは実数ではなく、未発見の遺跡がかなりあるとみななければならないが、阿武隈山地における早期・前期の遺跡数とは開きがあり、阿部隈山地にくらべ縄文早・前期の遺跡数は少ないことが指摘される。

保遺跡においては、小さな沢に面した台地の南西斜面の中腹に方形プランの竪穴住居址が二棟発見されている。住居址の規模は、三・五〇メートル×三メートルと二・五×三メートルの長方形プランであり、主柱穴は認められなかった。両住居址とも床面の一部に焼土が認められ、屋内に炉が設けられていたと推定される。床面検出の遺物が少ないが、ループ文（燃糸の末端の結束部で施した「の」の字の文様）や網目状の燃糸文がみられ大木1式ころと推定される。町内の三遺跡から発見された遺物は少量であり、また遺跡の範囲も小さく、達中久保遺跡同様二棟前後の構成であったと推定される。一棟あたりの居住人員は数名程度と推定されよう。宮城県今熊野遺跡では前前期の住居址が五九軒も発見されている

(同一時期ではない)が、これは例外的なもので、一般の集落形態は早期と大きな変化はなかったと考えられる。前期の石器の特色としては、早期に多用された石鏃が減少し、縦形の石匙(石小刀)が発達し、石鏃はやや大きく扁平な形態が多い。磨製石斧・磨石等も数を増し、玦状耳飾(せつじょう)がつくられるなど文化的な発達がうかがわれる。

相馬郡小高町宮田貝塚の報告書によれば、イノシシの骨片二六一点、シカ二〇七点が出土しており、次にタヌキ・ノウサギ・イヌ・キツネ・テン、さらに鳥類としてカモ・シギ・ウミウ・キジなどの出土が報告されている。貝類としては、オオノガイ・カガミガイ・アサリ・マガキ・アナダラ属・アカニシ・イボニシ・キサゴがあり、魚骨ではクロダイ(三五パーセント)、スズキ(三二・五パーセント)、マダイ(一七・五パーセント)、マフグ類(七・五パーセント)、サメ類・エメ類・コチ(各二・五パーセント)があげられている。

いわき市弘源寺貝塚においても、関山式土器とともにシカ・イノシシの骨、スズキ・クロダイ・マダイ・カンダイ・カツオ・サバの魚骨、ヤマトシジミ・ハマグリなどの貝類と、鹿角製の釣針・針などの出土が報告されている。

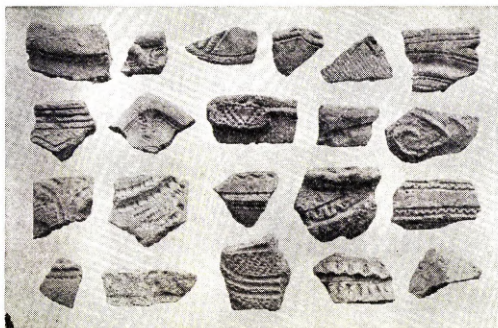
これらの報告は縄文前期の狩猟が、シカ・イノシシを中心とし、その他小型動物・鳥類に及ぶ状況と、海岸部における魚撈活動のあり方をよく伝えている。内陸部における漁撈については、現在のところ明らかではないが、釣漁法のほかに小規模な梁・ドウなどによる漁法等の存在も考慮されよう。

このように縄文前期の生活は、小さな集団で個人狩猟を中心とし、季節的な自生の植物を採集する生活であり、採集形態が未発達なため定住期間も短かいものであったと推定される。

(三) 縄文中期

中期の特徴

中期は、縄文化が大きく飛躍する時期である。集落は大規模となり、遺跡数も増加するとともに、住居址内に石組炉が普遍的に設置され、とくに本県内では複式炉が独特の発達を示す。一方、遺物のうえでも石皿のほか石棒・土偶・三脚石器(土製品もあり)などが出現し、呪術的要素をもつ遺物が増加し、また土器も本



縄文中期土器 松倉字諏訪清水・向原遺跡出土

来の煮沸・貯蔵などの機能からはなれ、上半部に大きな装飾がついた形態となり、土器自体にも呪術的な要素が感知される。

矢吹町内の中期の遺跡として『中畑地区地名表』には、前期の遺跡としてあげた渡池上遺跡では中期の阿玉台式も出土するとされ、柏山遺跡では加層利E式および後期の堀之内式の遺跡として掲載されている。遺跡カードでは、芹沢（柿之内字子八清水）・赤沢B（大和久字赤沢）があげられる。しかし、各遺跡とも資料を実見できなかった。

向原遺跡

向原遺跡は、『中畑地区地名表』では単に縄文土器とのみ記載されているが、比較的まとまった資料が出土している。

向原遺跡は、矢吹町の南端部にあたり、泉川の右岸、泉崎村に接しており、南西には水田地帯が広がっている。標高約二九〇メートルほどの台地上に位置し、『中畑地区地名表』によれば縄文土器のほか、弥生土器・土師器まで散布することが記されている。

縄文中期の遺物を上図に示したが、沈線の内部に節がある角押文・半截竹管文・浮線鋸齒文・捺糸庄痕文などが施文されており、大木7b式平行期と推定されるが、関東地方の阿玉台式土器の影響が強く感じられる。少量であるが大木8b式類似の破片もみられ、二～三時期に形成されたものと推定される。

須賀川市立博物館（故首藤保之助集藏品）には、陣ガ岡の丘陵上から大木8b式相当の土器が収蔵されている。また大字中畑字稲荷釜の北釜遺跡から中期末葉と推定される土器片が少量採集されている。

集落の発達
と生活

現在知られる中期の遺跡は、以上のように六遺跡ほどあげられ、前期にくらべ遺跡数の増加が推定されるが、遺跡の規模は不明であり、また具体的な遺構などもあげることとは不可能である。

本県内の中期後葉の遺跡は、独立丘陵上・舌状台地あるいは河岸段丘上などにならかなり大規模な集落を形成し、住居址は直径四〜七メートルの円形プランをもち、いずれも複式炉とよばれる特色ある炉を内部に備えている。住居址の数も増加し、遺跡の部分的な発掘で二〇棟前後が発見される例が増加している。

複式炉を屋内に備えた住居址は、新潟県下で中期中葉に出現し、中期中葉になって福島県内に広く普及し、南は北関東から、北は岩手県南部まで普及する。周辺部の複式炉はやや形態的な崩れがみられ、新潟・山形・福島・宮城が分布の中心と推定される。とくに県北・県中地方で集中して発見されており、二本松市の原瀬上原、塩沢上原A・B、田地ガ岡遺跡、郡山市のビワ首沢、本宮町の上原遺跡などでは、いずれも二〇棟前後の住居址が発見され、中期における集落規模の増大を示している。矢吹町内からは複式炉を伴う住居址が発見されていないが、阿武隈川をはさんだ対岸の石川町の田上遺跡では検出されており、当然複式炉の分布圏内に入っていると考えられる。

複式炉未発見の原因については、中期後葉の遺跡の立地条件である独立丘陵あるいは舌状台地等の地理的条件の不足が、遺跡数に影響している可能性があげられよう。すなわち矢吹町の地理的特色である平坦面が多いことが複式炉未発見の一原因とも考えられる。

縄文中期は、一般に遺跡数の増加と遺跡規模の増大などとともに遺物の面でも大きく飛躍した時期である。土器自体も機能的な面から離れた呪術的要素をもつものが作られるとともに、深鉢・浅鉢・大型・小型の機能的な分化が進み、さらに中期末には精製土器のほか縄文のみを施した深鉢形の粗製土器がつくられ、また器台とこれにのせる注口の付いた浅鉢がつくられるなど、生活用具としての発達と精神的な高まりを感じさせる。

生活用具の発達としては、石皿の発達があげられる。石皿の用途は、磨石との併用でトチの実やドングリ・球根類の製粉に用いられたと思われる、クッキー状炭化物やパン状炭化物の存在とあわせ、中期における食生活の改善を推測させる。

前期以前の食生活が狩猟と季節的な植物との組合せと想定した場合、狩猟は非常に不安定なものであり、食料の確保は困難が予想される。したがって集落規模も制約される。

トチの実・ドングリ等の堅果類は、貯蔵が容易であり、トチの実は近世においても備荒食糧として保存された例もあるように、これら堅果類を食糧として取り入れることは、生活上大きな変革であったと想定される。また堅果類の採集は女性でも可能であり、実質的な稼働人員の増加を意味する。あくまでも推測ではあるが、縄文中期の集落の大規模化、文化的発達は、このような堅果類の採集を中心とした生業形態への移行が大きな原因であったと考えたい。

中期集落の拡大とともに、集団内における個人的自由と集団の一員としての結束とが新たな問題となる。集団狩猟においては獲物の配分には一応の規律が必要であるが、これに対し植物の採集は個人的行為として認容されうる面があったと思われる。中期の集落では、各住居址ごとに炉を備えており、とくに複式炉の存在は各住居址単位の食生活が想定され、集団内における家族単位の行動を想定される。しかし、個人あるいは家族単位の行動はごく限定されたものであり、集落共同体内で植物採集の時期・地域・対象などについては強い規制があったと考えられる。さらに集落間にも狩猟圏・採集圏をめぐる対立も想定され、集団の一員としての規制は強いものであったと思われる。

縄文中期に石棒・土偶・三脚石器など呪術的遺物が多用されるが、これらは集団員の増加とともに集団内の結束や意識の統一を図る必要から発達したものとみられよう。

縄文中期は、文化的に大きく飛躍した時期であるが、中期末には後期文化の新しい胎動とともに、中期的生業形態からの脱皮や共同体組織の問題などが生まれつつあった。

(四) 縄文後期

土器の変化

中期の土器は、豪装華麗なものがつくられる一方、深鉢・浅鉢・特殊形態土器など、器形分化がみられ、その末葉には、精製土器とは別個に粗製の土器が作られ、用途により土器形態を分化する傾向を



縄文後期土器
中畑柏山・柏山遺跡出土

示す。後期になると器形の分化はさらに進み、深鉢・浅鉢はもちろん、注口土器が普遍化し、壺形土器が新しく加わるとともに、双口土器・濾過孔付注口土器・香炉形土器・環状胴注口土器など非常に特異な器形まで作製され、縄文土器発達の中で形態的分化が最高に達した時期といえる。

『中畑地区地名表』には、大字中畑地区の後期の遺跡として乗越・狐山・柏山の三遺跡があげられており、遺跡カードでは西原（明神字西原）・牛蒡作（矢吹字新町）・赤沢山（大和久字赤沢）遺跡と前述の柏山遺跡とがあげられており、六遺跡を数えることができる。

柏山遺跡

柏山遺跡は、松房池の西南方向約五〇〇メートルと六〇〇メートルの二地点にあり、毒清水から北へのびる小さな沢をはさんで所在する。元来はこの沢べりの微高地であったと思われるが昭和三十七年開田された。標高は約二九〇メートルである。

赤沢遺跡

遺物は、後期前葉の堀之内式に相当する土器と石鏃・打製石斧・石皿・磨石などが発見されている（『矢吹町史』2巻。資料編115(3)）。赤沢遺跡は、隈戸川が大信村から東流し、矢吹町大和久にいたって急角度をなして北流するが、その流路変換地の右岸に位置している。南東には大和久の丘陵が迫っており、隈戸川と大和久の丘陵にはさまれ、標高約二九〇メートルである。遺跡は東西約一〇〇メートル、南北五〇メートルほどであるが、東半分は土師器の散布がみられ、西端部が縄文後期の遺物包含層となっている。遺物は磨製石斧・石匕などが発見されている。

オムロ前遺跡からも堀之内式相当の土器が発見されているが地形その他は不明である。

縄文中期の集落は一般に独立丘陵上あるいは舌状台地の先端などに立地することが多い。これに対し後期の遺跡は、盆地内の低湿地周辺や河谷平



第2図 縄文後期土器 国見町川原遺跡出土
 (『東北自動車道遺跡調査報告』より抜粋)

○メイトルにも及ぶドーナツ状の配石遺構(環状列石)など、新しい後期文化へと変質していったといえよう。

中期から後期文化への変質の要因は明らかではないが、集落の低地化については、採集対象物を低地あるいは低湿地等に求めたとも考えられ、生業形態の変化があったものと推定しておきたい。また土器形態の変化は採集物の変化とあわせ、食生活の改善も推定される。

地の微高地に位置することが多い。柏山遺跡・赤沢山遺跡とも低地に立地し、後期集落としての特色をもっている。集落の規模は中期の遺跡にくらべ縮小していることが感じられる。

集落立地の変化

縄文後期は、土器形態の分化の面で大きな発達をみせるとともに、海岸地帯では各種の漁撈用具の発達をみ、また貝製の腕輪や鹿角製のヘアピン・腰飾・耳飾、土面・土版・岩版・スタンブ型土製品など各種の遺物が出現する。さらに彩色土器・漆器なども使用しており、後期文化の発展を示している。

一方、遺跡の立地は台地上から低地への移行が目立ち、規模も縮小する傾向を示す。また中期後葉に非常に発達をみせた複式炉は完全に姿を消し、単純な石囲炉と変化する。これらの変化に相応して、堅穴床面に平石を敷きつめた敷石住居址、あるいは船引町前田遺跡にみられるような直径三〇〜五

さきに環状列石などの石造遺構の発達についてのべたが、直径三〇～五〇メートルにも及ぶ環状列石の築造は集落共同体の総力によって行われたものと推定される。このような労働力を集結させる必要性は、集落共同体の結束を高める必要性が大きな起因とも考えられよう。

貝塚出土の後期人骨を検討すると健康な歯を計画的に抜歯する風習があったことが知られ、成人して集落の成員となるための通過儀礼と考えられているが、これもまた集落の一員としての規制と結束を高めるための要因であったと推定される。

このように後期社会の特色として、集団規制の強化がうかがわれる。その原因は明らかではないが、中期以降の人口の増加と自然の食料資料の供給とのバランスが問題の一つと考えられる。人口増加とともに集落共同体の採集圏の確保、あるいは共同体内部での採集の時期、地域等の問題での内部規制等の必要性などが大きな要因でなかったかと想定される。

(五) 縄文晩期

縄文晩期の土器 縄文晩期は、亀岡式土器（青森県亀岡遺跡の土器を標式とする）の名で広く知られるように、肉彫り的な技法を用いた精緻な土器が数多くつくられた時期である。

精製土器は、後期の土器が非常に変化に富んでいるのに対し、晩期になると器形・文様とも定形化する。器形は、深鉢・浅鉢・壺・注口土器があり、注口土器は算盤玉のように胴中央部が稜線をもって張出したような形となり、文様は胴上半部に磨消緒文手法を伴う半肉彫り的手法で加飾される。またよく磨きがかけられ光沢をもった精緻なものがある。文様は、前葉には横位に展開する複雑な雲形文が発達するが、徐々に雲形文は平板化し、単純化して工字文へ移行し磨消縄文はみられなくなる。

粗製土器は、単純な深鉢形で、施文は擦糸文・網目状擦糸文・斜縄文・条痕文などがあり、複合口縁が多い。これらの粗製土器は、炭化物の付着や再加熱痕が強く主として食物の煮沸に用いられたと推定される。

晩期の生活

土器以外には、後期と同様、土偶・土版・耳飾・スタンプ形土製品・土錘などがあり、まれには土棒・石刀などがある。いわき市の寺脇貝塚では、鹿角製の組合鈎針・離頭鉋頭などのすぐれた漁撈用具や裝飾品が発見されている。

矢吹町内の縄文晩期の遺跡は、現在のところ柿之内字子八清水、芹沢の芹沢遺跡しか知られていない。同遺跡は、矢吹町の最西端に位置し、東西にのびる沢の北縁の緩斜面に立地しており、標高は二九〇～三〇〇メートルほどである。約七万平方メートルほどの広範囲にわたり土師の散布がみられるが、その一部から縄文中期・晩期の遺物が採集される。

縄文晩期の遺跡は、後期と同様、河谷平地あるいは氾濫原を望む地点に位置することが多い。関東地方では晩期の貝塚はほとんどみられなくなり、内陸部でも遺跡の数が減少していることが指摘されている。

本県内においては、晩期の遺跡数が減少する傾向が感じられるが、晩期の遺跡は標高三〇〇～四〇〇メートルの山間部に意外に分布している。広範囲にわたる統計的な分析が行われていないため明確ではない。

矢吹町内での晩期の遺跡は、一遺跡のみしかあげえなかったが、時期が明確でない縄文遺跡がかなりあり、それらの時期別検討を行わなければ明らかにすることはできない。

縄文晩期は、縄文土器を代表する亀岡式土器がつくられた時期であり、土器製作技術としては最も発達した段階にあったといえる。また土器のみでなく前述のように各種の遺物がつくられ、漆塗の土器や藍胎漆器のような漆工芸の発達、あるいは海岸部における精巧な漁撈用具の発達など東北地方の縄文晩期は高い文化内容を示している。これに対し、関東地方以西では文化的停滞がみられ、その間隙を縫うように亀岡原土器の影響が遠く愛知県内まで浸透している。一方、遺跡の規模は小さくなる傾向を示し、抜歯の風習が引き続き行われ、土器の器形が定形化する傾向等は、採集経済における問題点をかかえ、集落共同体内の規制がさらに厳しさを増したものと推定される。

矢吹町内の晩期の文化内容は、発掘調査の資料がなく明確ではないが、堅果類をはじめとする自生植物の採集と狩猟と

により、地方的特色をもちながら晩期の文化を維持していたものと推定しておきたい。

新しい文化への発展

縄文文化は、早期の二棟一群とよばれるような小規模な集落から中期の大規模な集落へと発展し、後期・晩期へと文化的発展をみせたが、採集経済から抜けきれなかった。自然の食料資源の供給には限度があり、人口増加とともに需要と供給とのバランスは崩れざるをえない。晩期における関東地方以西の文化的停滞は、このような採集経済の矛盾が起因と考えられよう。

縄文晩期の後葉（紀元前三〇〇年ごろ）、北九州地方を中心として、大陸文化の影響をうけた新しい文化が誕生した。いわゆる弥生文化とよばれるものであり、急速に東日本に波及した。矢吹地方にも紀元一〇〇年ごろ弥生文化が波及し、縄文時代は終末を告げる。

矢吹町内の縄文遺跡の発掘調査は、現在のところ下荒具C遺跡のみであり、その他の資料も非常に少なく、縄文文化を明確にすることは困難な状況である。しかし、縄文遺跡は数多く存在しており、今後これらの保存と調査を行えば矢吹町内の原始文化を明らかにすることが可能である。祖先の遺した貴重な文化遺産を大切に取扱うことが必要である。

（目黒 吉明）

第三章 弥生時代

一 弥生時代の概観

弥生時代の特徴

旧石器時代に続く縄文文化は、約一万年前ころ日本列島に誕生し、日本列島内で徐々に発達し、縄文晩期には、精緻な土器・漆器など原始工芸として優れた水準に達し、また漁撈用具である骨角器など

第3表 弥生土器編年表

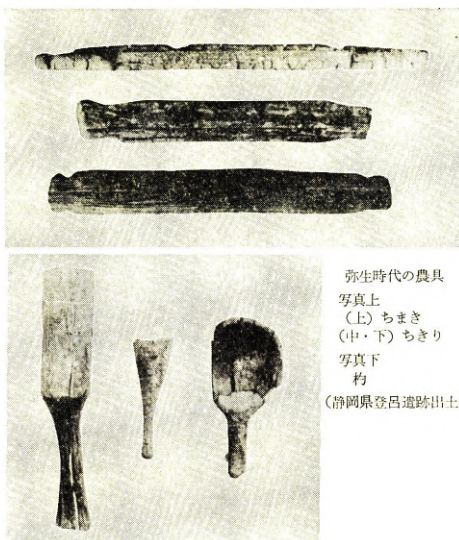
北関東西部	北関東東部	福 島 県				宮城県および 岩手県南部
		浜通り南部	会津地方	中通り地方	浜通り北部	
四十坂 仙波 出流原 竜見町 荒口 用土?+	女方(一部) 野沢Ⅰ 野沢Ⅱ 足洗	+ 天神原 玉山	上野尻 今和泉 南御山Ⅰ 南御山Ⅱ ニツ釜 川原町口 三百刈	御代田 枇杷沢 棚倉 柏山 下高野 天ガ (県北)←	藤堂塚 上ノ原 原山 桜井Ⅰ 桜井Ⅱ	福浦島下層 寺下囲? 櫛形囲 南小泉・西台畑 円田 清水 南小泉の一部
剣崎? 樽	東中根 長岡 十王台	+ + 長子・郡	中開津 勝常村南	天王山 大山 大高平・諸田	上ノ原 (一部)	常盤・崎山囲 (一部) +

(中村五郎作製、目黒修正)

も機能的に非常に優れた段階に達していた。しかし縄文文化は、石器や骨角器を用いての狩猟あるいは漁撈と自生植物の採集を生業とする採集経済の段階にあったと推定されている。

紀元前三〇〇年ごろ北九州地方に、大陸文化の影響をうけて新しい文化が誕生した。稲作を行い、機織の技術をもつとともに、金属器を伴う高度な文化であり、共存する石器も柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧・石庖丁・石鎌(磨製)など縄文時代の石器とは形態を異にすることが指摘されている。

弥生時代の下限は、階級社会成立のメルクマールとされる古墳(王あるいは豪族のため基かれた高塚式の大形墳墓)が築造されるまでとされ、その時期は三世紀末ないし四世紀初頭と推定されている。弥生時代は、この間約六〇〇年にわたるが、大きく紀元前三〜二世紀の約二〇〇年を前期とし、紀元前一世紀と紀元一世紀の二〇〇年を中期、紀元二〜三世紀を後期として大別し、さらに各期を土器形式によって細別している。北九州に誕生した弥生文化は、前期には大阪平野や畿内まで波及し、畿内では畿内第一様式(古・中・新)土器が形成される。さらに愛知県周辺では、



弥生時代の農具
写真上 (上) ちまき
(中・下) ちきり
写真下
杓
(静岡県登呂遺跡出土)

畿内第一様式類似の土器とともに縄文土器の影響を強くうけた条痕を施した甕類が共伴し、東海地方西部においては、前期後葉の時期に同地の縄文土器の伝統を強くのこした弥生土器形式が形成されたといわれる。

東日本への弥生文化の波及は、前述の東海地方の弥生文化を媒体として吸収されたとみられ、関東地方の初期の弥生土器には、東海地方の条痕文土器の影響が強く現われている。本県内からも東海地方で作られて搬入されたと推定される条痕文土器や、木葉文土器(破片)などが発見されている。しかし、波及期以降は、縄文土器の伝統を強くのこした地域色の濃厚な土器が主体としてこのされている。県内への弥生文化波及の時期については、従来中期初頭と考えられていた

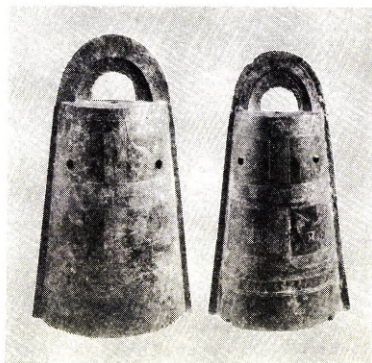
が、畿内第一様式と推定される木葉文土器片の出土などから、前期末葉の時期とする説も出されている。実年代としては、紀元前一〇〇年前後のころと推定される。

福島県下の弥生土器の細別は第3表のとおりである。

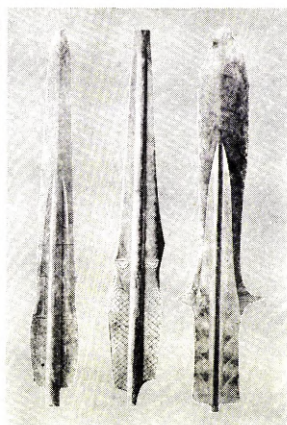
稲作の開始 弥生時代の遺物としては、前述の土器・石器のほか、アメリカ

式石鏃・環状石器・有角石斧・勾玉・管玉、糸を防ぐ紡錘車などがある。とくに石庖丁は、稲の穂刈りに用いたものといわれ、農耕を裏付ける資料とされている。

次に静岡県登呂遺跡などの湿地遺跡からは、木製の鋤・鍬・三本鍬・田下駄・臼・タテ杵・機織(部



銅 鐺 神戸市桜ヶ丘・神戸市立考古館蔵



銅 剣 (右)岡山県瑜珈山出土 (中)香川県瓦谷出土・東京国立博物館蔵 (左)兵庫県古津呂・文化庁蔵

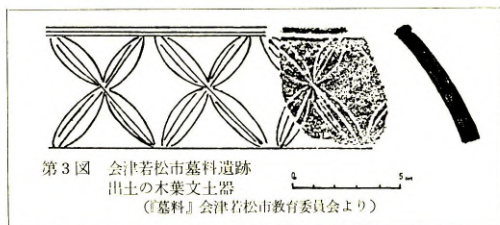
術的要素を強く備えたものと思われ、初期の統率者は呪術性の強い性格のものであったと思われる。しかし、西日本においては、大陸の文物の吸収、さらに稲作技師の向上などにより、より大きな共同体の統率者へと成長していった。さらには統率者の連合体、あるいは連合体の統率者へと伸展したものと思われる。

西日本には、畿内を中心とする銅鐸の分布圏、北九州を中心とする刃幅の広い銅剣・銅鐻・銅矛などの分布圏の存在が知られている。これらの銅器は、いずれも非実用的な国内製のものであり、祭器と考えられ、前述の共同体の祭器として使用されたものと推定されている。

「魏志倭人伝」にみえる耶馬台国をはじめとする小国家群の記述については、弥生時代後期の西日本の社会的形態をよく表わしているも

分)、その他各種の什器とともに、杭・矢板で築いた水田跡、高床建物の部材などが発見され、弥生時代における稲作を主体とする農業技術発達状況と、日常生活のあり様を明確にしている。

農業技師の向上とともに、開田・灌漑・排水の工事のためには、共同作業が必要であり、水源の確保などのためには、一つの集落共同体の枠をこえて、共同体相互の協力や結束も必要とされ、やがて各地域に統率者が生まれた。当時の農業は、近代までみられた農業予呪が示すように、呪



のと思われる。これに対し、東日本においては、まだ強力な共同体組織の存在を示す資料は発見されていない。

弥生時代の墓跡

弥生時代の特種な墓跡として、方形に溝を巡らし、一辺が数メートルから約二〇メートルほどの方形の地域を区画し、内部に土壙をつくり、死者を埋葬した方形周溝墓とよばれるものがある。方形周溝墓は、弥生時代から古墳時代まで築造されるが、被葬者は一般人ではなく共同体の特殊な位置にあった人物と推定される。弥生時代の方形周溝墓は、関東地方以西では発見されているが、本県内では未発見であり、この点からも東北地方の弥生時代に階級制度の萌芽をうかがうことはまだできないといえよう。

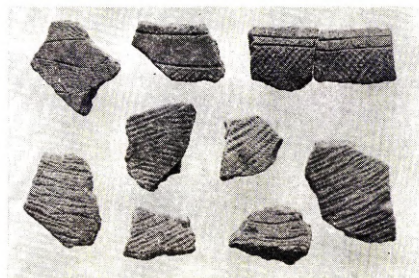
(目黒 吉明)

二 弥生時代の遺跡と生活

(一) 弥生時代中期

弥生文化の波及

会津若松市の墓料遺跡から再葬墓に埋納された古式の弥生土器とともに、木葉文の付いた一片の土器が発見された。木葉文は、畿内第一様式土器に用いられる文様であり、弥生時代前期に位置付けられる可能性が高い。また矢吹町の東南から僅かの距離にある石川町の鳥内遺跡からは、畿内第一様式の器形に類似する壺形土器が発見されており、本県内への弥生文化の波及の時期が、前期の後葉まで遡る可能性がある。しかし、墓料の木葉文土器片の出土状況が不明であり、鳥内遺跡の壺形土器は、関東・東海東部に類例がなく、現時点では畿内第一様式との関連を論証するには困難である。



弥生式土器 中畑字国神・萱山遺跡出土



弥生式土器 明新中・平林出土
(渡辺福松蔵)



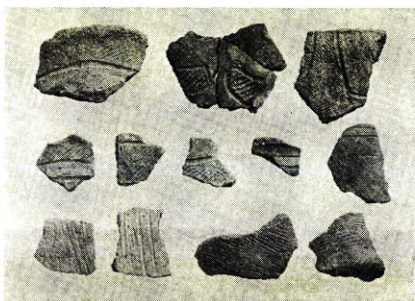
弥生式土器 中畑字鍋内・愛宕下遺跡出土



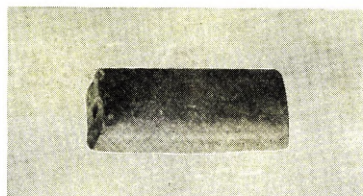
弥生式土器 中畑字田町・北釜
遺跡出土



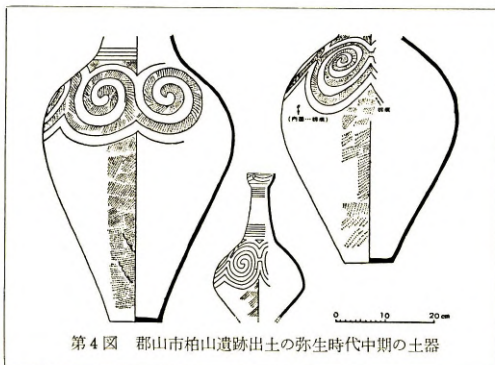
弥生式土器 矢吹町字一本木・
一本木遺跡出土



弥生式土器 大和久字赤沢・赤沢山遺跡出土



管玉
中畑字国神・萱山
遺跡出土



第4図 郡山市柏山遺跡出土の弥生時代中期の土器

矢吹町の 弥生時代遺跡

矢吹町の弥生時代の遺跡としては、新発見の明新の平林遺跡を加えると二二遺跡が登録されている。このうち、平林遺跡・赤沢山遺跡（一部）・北釜（目黒の記録では、稲荷釜になっているが、地名表では古式弥生の遺跡は北釜になっているので、遺跡名変更とみなす）遺跡からは、太い沈線と磨消縄文を施し、底部には木葉の圧痕がみられる。北釜遺跡の土器は、細頸壺の口頸部であり、口縁部に磨消緒文手法による菱形文を描いてある。いずれも断片的な資料であり、弥生時代中期前葉のものと推定されるが、遺跡の性格は不明である。

萱山遺跡・一本木遺跡・愛宕下遺跡・赤沢山遺跡（一部の土器）などから発見された土器は、細い沈線で囲んだ縄文帯で渦文や菱形文を描いた一群と、細い沈線のみ（縄文帯を省く）で渦文等を描いた一群とがある。器形は、細頸壺と一本木遺跡出土のような縄文のみを施した甕が主体であり、これに高杯や小型鉢などが伴うことが予測される。これらの土器群は、中期中葉に位置付けられる。なお、萱山遺跡からは、大型の管玉が発見されている。管玉は、小堅穴墓から発見されることが多く、萱山遺跡は墓跡の可能性がある。



小堅穴墓群 石川町・鳥内遺跡出土
(石川教育委員会提供)

中畑	〃	一一	大和久	一
松倉	〃	五	計	二二

弥生遺跡が中畑・松倉地区に集中していることが指摘される。その原因の一つに石井亘氏により同地の分布調査が詳細に実施されたことがあげられるが、さらに基本的な問題として松倉→中畑と流れる泉川流域が、弥生時代とくに中期の農業経営上、最適の環境であったためと思われる。

この地区の遺跡は、標高三〇〇メートル前後の丘陵上あるいは微高地等に立地しており、その周辺には標高二八〇から三〇〇メートルの泉川の氾濫原、あるいは泉川に集水される低湿地が存在している。また泉川流域の沖積面は、広大な阿武隈流域と異なり、地形的に小規模な農業土木力で水田経営を可能にする条件を備えていたといえよう。このような好条件が弥生中期中葉になって遺跡数の増加をみた原因であったとみることができよう。

弥生時代の生活

矢吹町内の弥生遺跡の分布を地区別に見ると次のとおりである。

神田地区	一	矢吹地区	二
明神	〃	一	中畑新田

次に大久保遺跡については、『矢吹町史第2巻』に、大久

弥生時代の人々は、泉州流域で灌漑・排水の容易な低湿地を選び、矢板や杭で畦を築き、木製の鍬・鋤・三本鍬・田下駄などを用いて水田経営を行い、秋には石廂丁で稲の穂を刈り取ったものと推定される。

集落は、数軒単位の竪穴住居を構えたものと推定される。銅鐸には高床式の建物が描かれており、登呂遺跡でも高床式建物の存在が明確になっており、集落内には高床式建物もつくられ、穀の貯蔵などが行われた可能性がある。弥生時代以来、米が主食とされたが、当時の農業技術でどの程度の収穫があったかは明らかではない。とくに東北地方では、多くの収穫は望めず、縄文時代に引き継ぎ、狩猟や自生植物の採集もあわせて行われたものと推定される。

弥生時代の墓

弥生時代の墓跡としては、小竪穴墓・土器棺墓・土壇墓などがあげられる。矢吹町の東南端に接する石川町島内遺跡からは、多数の小竪穴墓が発掘された。小竪穴墓は、直径一〜二メートル程度の小竪穴から土器が一〜一〇個前後埋納されて発見されるもので、土器に埋納された人骨は、ほとんど腐敗し、発見されないが、須賀川市牡丹平遺跡から、男性成人骨はほぼ一体分が倒立した弥生土器に入って発見された。土器は高さが約二九センチの甕であり、成人骨は軟体部が取り除かれ、洗骨のうえ再葬されたものと考えられる。洗骨前の処理がどのような経過が行われるか不明であるが、東日本の弥生時代中期には小竪穴墓・土器棺墓などによる再葬が一般的に行われたと推定される。なお牡丹平遺跡出土人骨は抜歯を行っており、縄文時代から弥生時代に抜歯の風習が引き継がれたことが明らかになった。

再葬墓からは、管玉や勾玉が発見されることがある。すべての墓跡に伴うものではなく、玉類を合葬される特殊な人物が存在したことが知られる。しかし、管玉のうち太型・中型のものが意識的に破砕されている場合が多く、死者が現世へ復帰するのを断つためとも考えられ、単純に副葬品とすることには検討の余地がある。玉類を所持する特殊な人物が存在したが、葬制のうえでは差別がなく、同一の取扱いをうけたとみることができよう。



第5図 天王山式土器実測図（白河市天王山遺跡）、（『県史』6巻より）

(二) 弥生時代後期

天王山式土器

昭和二十五年、白河市久田野の豆柄山の山頂から多数の土器が発見された。故藤田定市・故岩越二郎により調査収集された。遺跡の立地も周辺の水田面との比高八〇メートルという特異性とともに、土器も従来の知見にはないものであった。土器とともに炭化米や炭化クルミ・炭化クリ・樹皮などの植物質遺物なども発見された。また、アメリカ式石鏃・管玉・環状石器・紡錘車なども発見された。とくに弥生時代の米の発見として重視された。

土器の特色としては、縄文土器の工字文の影響を強くのこしていること磨消縄文手法をもつこと、浮線鋸歯文を多用すること、甕（あるいは広口壺）に施文があり大型壺に加飾がみられないこと、縄文の条が縦か横方向を示すことなどがあげられた。縄文要素が強いため古式弥生土器とも考えられたが、関東地方の土器との対比等によって、現在では天王山式土器として後期初頭へ位置付けされている。

さらに天王山式系の土器は、三型式ほどの推移が考えられている。矢吹町の西南に接する泉崎村の踏瀬大山遺跡の遺物がその一つである。遺跡は、三方を水田に囲まれた独立丘陵上にあり、比高は二〇メートルほどある。土器は、天王山式土器と強い関連をもつが、磨消縄文の単純化、浮線鋸歯文の退化などの相違点がみられる。

矢吹町内からは、現在のところ天王山式系の遺物は発見されていない。天王山式系の遺跡は前述のように平地との比高差のある丘陵上に立地することが多く、発見されにくい点もあると思われる。しかし、泉崎の踏瀬大山遺跡の存在が示すように当町内にも必ず発見されるものと思われる。

問題点

中期末の土器と天王山式土器を比較すると大きな問題点がうかぶ。中期末の土器は、中期初頭に引継いだ縄文土器の工字文の要素を、平行工具による渦文・菱形文などに変化させており、工字文要素の

強い天王山式土器への垂直的な変化は考えられない。種々の問題から天王山式土器は、東北南部からの弥生文化の影響を受けて東北地方北部で形成された北方的弥生文化が、逆に南下し本県南部まで波及したと想定したい。環状石器・アメリカ式石鏃なども、より縄文的要素であり、北方的要素とみることが妥当であろう。

この天王山式系の土器は、東北地方に広く分布しており、中期の地域性が薄れ、東北一円が共通の文化的基盤にのぼったように思える。天王山式系文化の南下には、大きな社会的変動を考慮させるものがある。軍事的な支配とか、少数の人口移動等によるものと理解することは困難である。南下した天王山式系の文化には、経済的に強い力があつたのではなからうか。西日本では銅鐸・銅鉾等の分布圏が推定されているが、東北地方にも共通の祭祀を行う連合体的なものの存在を考へることは困難であらうか、独立丘陵上に立地する天王山系遺跡の性格解明とともに今後の研究に待ちたい。

(目黒 吉明)